

二〇一七年度

普連土学園中学校 入学試験問題

二〇一七年 二月二日実施

国語

二次

- 一、問題に答える時間は五十分です。
- 二、問題は、問題一 ～ 問題五 まであります。
- 三、答はすべて、「解答用紙」に記入しなさい。
- 四、「解答用紙」は中に二枚はさんであります。

問題一

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

今さら強調することでもありませんが、現在僕たちを取り巻くメディア環境は大きく変化しつつあります。もちろん、あたらしい技術は必ずあたらしい問題を引き起こす。^{*}淘汰されゆくものだけが持つよさもあるでしょう。しかし僕は実のところ「電子書籍の波がやってきた後も残るであろう紙の本のよさ」とか「インターネット時代にも残るマスメディアの役割」といった旧マスコミ業界人が大好きな「いい話」に、心のどこかで冷淡になつてしまふところがあります。

もちろん彼らの「いい話」は正しい。だがその正しさは、何かもつと本質的なことを^{*}隠蔽するために必要以上に強調されているように思えます。

実は^②この種の問題を語るときによく引用される童話があります。それは新美南吉の童話『おぢいさんのランプ』です。これは日露戦争のころ農村にランプを普及させて成功した男の物語です。ある日、村に電気を引くことが決まり、主人公の営むランプ屋は存亡の危機に立たされます。行政を逆恨みした主人公はなんと区長の家への放火を試みるのですが、そのとき火打ち石でなかなか着火することができず、焦って独りごちるのです。マッチを持ってくればよかった、火打ち石のような古いものはいざというときに役に立たない、と。そしてここで主人公はハッとしみます。古いものはいざというときに役に立たない——自分が間違っていたことに気づいた彼は、泣きながら在庫のランプを自らの手で割って、廃業を決意することになります。

そして、僕が考えるこの童話の^{*}白眉はその^①エピソードです。時は下り昭和一〇年代、ランプ屋を辞めて街で本屋を営むようになった主人公はその孫に自分の体験を語ります。このエピソードから浮かび上がってくるのは^③新美の「知」への信頼です。主人公がランプ屋を廃業した後、本屋になったのは、おそらくどんなに時代が移ろって、ランプが電球になり電球が蛍光灯になったとしても、言葉を通して知を共有する文化は変わることがないという確信があったからだと思えます。

新美のこの確信を僕は支持したい。しかし新美が強く信じていた文化のかたち、つまり人間と知（を伝達する情報）との関係は、彼が想像したであろうものよりも圧倒的に速く、そして決定的に変化しています。もちろん古いメディアの役割は今すぐゼロにはならない。しかし少なくとも「このまま」ではいられない。そして「俺たち旧メディアだからこそできることがあるんだよ」といった「いい話」たちの何割かは確実に、^④この現実から目を背けるためにささやかれている。だとす

れば、そんな「正しい」話たちは別の次元では害悪としてしか機能しないでしょう。

エピソードでさらに彼は告白します。実は電気が村に通った後も、ランプの需要そのものは決定的にはなくならず、続けようと思えばランプ屋は継続できたのだ、と。しかし、それでも彼は廃業した。なぜか。それはランプが彼にとって文明開化の象徴だったからです。だからこそ彼はランプが時代を象徴する力を失うと同時に廃業したのです。そして僕は思います。

⑤ 時代を切り開き、本当の意味で文化を守り育てるのはこうした知性に他ならない、と。

前述の通り、この『おぢいさんのランプ』は電子書籍をめぐる議論でよく引き合いに出される童話です。しかし僕はこの童話で描かれているような、^⑥ 技術革新がもたらす社会の変革はいま、日本の文字文化についてはより本質的なレベルで行っていると考えています。それは紙の本がなくなつて電子書籍にとつて代わられる、という表面的なレベルの変化ではない。

たとえば今流通している日本語の、いわゆる「四六判（約一三〇×一八八ミリサイズ）」の本はどういうものかと言うと、一冊一〇〇一五万字を、だいたい約一万字の章に分けて読ませているものです。一文の文字数は大体一〇〇〇〜二〇〇字くらいできていますが、実のところこの形式と規模はほとんどなんの合理性もなく決まっているものです。この日本語の散文の形式はおそらく、明治期の知識人が外国語の翻訳作業を通して現在の日本語をかたちづくっていった頃にその原型が生まれ、その後の出版事情の変化の中でマイナーチェンジを繰り返してきたものだと思います。そして、現在のこの日本語の本と散文の形式を定めているのは、出版社の制作コストや書店での陳列ルールの慣習です。こうしたものを基準に本の大きさやページ数、ひいては文章量やその区切り方が決まっている。これが意味するところは何かというと、前述の日本語の形式は特に人間が生理的に理解しやすい形式でもなければ、リズムでもなければ、分量でもない、ということだと思います。少なくとも、そのために最適化されてきたものではない。

たとえばツイッターでフォロアー数が一〇〇人くらいの人は、ほぼタイムラインの投稿を全部読んでいることが多いはずですが。仮にひとり一日二回つぶやいたとした場合、一日にこれを全部読むと最大二万八〇〇〇字になる。こうして考えてみると活字離れなんて嘘で、日本人は三日か四日で一冊分くらいの活字を読んでいることになる。もちろん、同じ書き言葉でもソーシャルメディアの言葉と本の言葉はまったく違う。けれど、今の日本語の本で支配的な散文の形式やその切り分け方

が、人間に文字情報を通じて何かを伝えるときにどれくらい適しているか考え直さないといけない時期に来ているのは間違いない、と僕は思います。なぜならば、技術的にそれが可能になっているからです。それは出版文化だけではなく、僕たちの書き言葉によるコミュニケーションや教育すら変えうるものでしょう。

単純に考えて、ここ一〇年余りの情報化の進行は人間と「言葉」との関係を大きく書き換えていきます。^⑦ デジタル化で「紙の本」というものの存在意義が大きく揺らいでいるのはもちろんのことですが、僕はもつと本質的な変化が現代には起こっていると考えています。

有史以来、人間がここまで日常的に書き言葉でコミュニケーションをとっている時代はない。たとえば僕たちは携帯のメールやライン（LINE）で連絡をとりあい、ブログやツイッターやフェイスブックに日々の雑感を記している。この一点をもつてしても、現代における情報化の進行は人類の文化そのものを大きく変化させようとしているはずです。僕たちは「言葉」というもののかかわり方自体を否応なく問い直す時代に生きていて、その大きな変化のあくまで一部分として本や雑誌の問題がある、と考えたほうがいい。

その意味では、これまでの本は「本という形式が得意とする領域」以上の役割を負わされていたと思います。たとえば知識や技術の伝達、政治的主張、宗教の布教活動、共同体の神話や物語の保存など、これまでの本は多くの役割を担ってきました。そうした目的で、人間が他者のまとまった考えに文字情報で接することを求めた場合、長いあいだ本を読むということ以外に手段がなかった。しかし現在では本を読むこと以外に、情報に触れるための回路がたくさん登場していて、必然的に本それ自体が機能面を含めた更新を迫られている。すると^⑧ これまでの形式の本というのは、本という形式を愛する趣味人のための骨董品のようなものになっていく可能性が高い。しかし、かつて本が担っていた快楽や人に与える知的興奮、社会的な効果などは必要とされることに変わりはない。人間と情報の関係が大きく書き換えられてしまった今、どのようなものに乗せて人に届けられるべきかということを考える必要があるでしょう。

たとえば知識取得の手段をゲームとして捉えると、これまでは自分の外に本をいくつ積み上げるかというゲームだったのが、今ではネットワーク内の膨大な情報から何を切りだしていくべきか、というゲームに変わってしまった。その時に「お前ら、ちゃんと本を読め」というのはあまりに無意味です。そうではなく、かつて本が担っていた機能を更新させる方法を考えないといけない。

極端な話、生まれた時からネットワークにつながっている人間が多数派となり、彼らが吐き出した言葉がネット上に自動的に集積されていく環境が*所与のものとなったとしたら、集積された情報に**⑥**アクセスするための検索ツールさえあればよい、という状態も十二分に想定し得る。今まで書き言葉とは基本的に自分の外側にある特別なもので、それを本というパッケージジググされたものを通して撮取してきた。そのため、それを積み上げることが教養を得ることであり、成長だと考えられてきたわけです。しかし今の僕たちはすでに、言葉や教養、知識体系などさまざまな情報ネットワークに接続されているため、個々の情報をどこで区切るかのほうが問題になっている。つまり、**⑨**これまでの人間と情報の関係がほぼ逆転していることになります。

(宇野 常寛 『日本文化の論点』 ちくま新書)

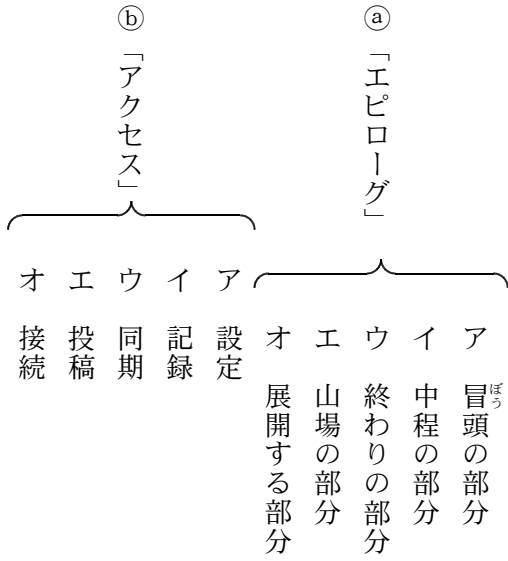
〈注〉*淘汰……不要なものを除き去ること。

*隠蔽……覆い隠すこと。

*白眉……(蜀の馬氏の兄弟はみな秀才であったが、まゆに白毛のある馬良が最もすぐれていたという中国の故事から) 多数あるものうち、最もすぐれているものや人のたとえ。

*所与……与えられていること。

問一 〓 線部①「エピソード」・②「アクセス」の意味として、最も適当なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。



問二 〓 線部①「『いい話』」とありますが、「いい話」にかぎかっこ（「」）がついていることで、筆者のどのような意図が込められていると考えられますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 「いい話」は、誰もが納得できる話であるということ。

イ 「いい話」は、古いものだけにある良さを持つということ。

ウ 「いい話」は、旧マスコミ業界に注目されているということ。

エ 「いい話」は、皆が考えているよりも正しいということ。

オ 「いい話」は、良い面ばかりではないということ。

問三 〓 線部②「この種の問題を語るときによく引用される」とありますが、一般的にどのようなことを言おうとして「よく引用される」のですか。次の文の空欄に合うように答えなさい。

は愚かであるということ。

問四 —— 線部③「新美の『知』への信頼」とありますが、これはどのようなことを表していますか。次の文の空欄に合うように本文中の言葉を抜き出して答えなさい。

新美が

_____を持っているということ。

問五 —— 線部④「この現実」とありますが、それはどのような「現実」ですか。その説明として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 旧マスコミ業界人の話には、本質的な問題が隠されているという現実。

イ 技術革新がもたらした新技術は、多くの問題を引き起こす恐れがあるという現実。

ウ 古いメディアであっても残ってさえいれば必ず役に立つ時が来るという現実。

エ 現代社会におけるメディアには、何らかの変化が求められているという現実。

オ 時代は移ろっても淘汰されるものだけがもつ良さがあるという現実。

問六 —— 線部⑤「時代を切り開き、本当の意味で文化を守り育てるのはこうした知性に他ならない」とありますが、それはどういうことですか。その説明として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア たえ新しい時代を創るような力のあるものでも、古くなれば自然と新しいものが生まれてくるということを見抜く目
がなければ、時代に合った文化を築き上げるのは困難であるということ。

イ 初めて見る新しいものの良さを瞬時に判断し、それが古いものの代用になるかどうかを直感的に見極めることができる
能力こそが、大切な文化を守っていくのだということ。

ウ 古いものに執着することなく、技術革新による社会の変化を受け入れ、積極的に担おうとする人達こそが、新たな時代
における真の文化を育てるのだということ。

エ 流行にながされず、存在理由や価値を充分に考えて今あるものが必要かどうかを正しく判断する力こそが、移ろう時代
のなかでねばり強く生きる文化を創り上げるのだということ。

オ 確たる信念にもとづいて需要の有無を決め、不要なものを選別していく勇氣こそが、次々と変化していく文化を受け入
れながらも、新しい時代を築くことにつながっていくのだということ。

問七 —— 線部⑥「技術革新がもたらす社会の変革はいま、日本の文字文化についてはより本質的なレベルで進行していると考えています」とありますが、筆者は「日本の文字文化」について現在、具体的にどのような状態にあると考えていますか。本文中から七十五字程度で抜き出し、最初と最後のそれぞれ五字を答えなさい。

問八 —— 線部⑦「デジタル化で『紙の本』というものの存在意義が大きく揺らいでいる」とありますが、それはどういふことですか。その説明として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 電子書籍の便利さに皆が注目し、紙の本が処分されているということ。

イ 電子書籍が普及し、紙の本の需要が減ってきているということ。

ウ 紙の本が持つあたたかさや機能性が忘れ去られようとしているということ。

エ 本の形式がデジタル化を前提に見直されつつあるということ。

オ デジタル化によって紙の本がもつ良さが省みられなくなったということ。

問九 —— 線部⑧「これまでの形式の本」が、読まれ続けてきたのはなぜですか。その理由として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 「本」の機能はいつまでも更新されないので、安定して情報に触れることができたから。

イ 「本」は知識や技術の伝達や政治的な主張など、本来得意とする役割を担っていたから。

ウ 「本」には人間に興奮や快楽を与える負の力があり、それらが強く求められていたから。

エ 「本」を読むことが、他者のまとまった考えに文字情報で接する唯一の手段だったから。

オ 「本」を愛する人にとって、趣味で集める骨董品のようなものとして扱われていたから。

問十 —— 線部⑨「これまでの人間と情報の関係がほぼ逆転していることになりました」とありますが、この変化の説明として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア これまで人間は情報を集めて自分の中で知識をまとめあげてきたが、現在ではすでに外に積み上げられている情報を切り取って活用するようになっていくこと。

イ これまで人間が大変な努力をして情報を集めていたが、現在では人間が不要な情報を切り捨てることのみを苦勞を強いられるようになったということ。

ウ これまでの情報は人間が「本」という形でのみ発信してきたが、現在では発信された情報がネットのなかに集積され、人間から検索される存在になったということ。

エ これまでの情報は自分の外側にあるものとして存在していたが、現在ではネット上でつぶやかれたものが情報となり、自分の外側にあるものが知識としての価値を持たなくなったということ。

オ これまでより多くの知識を集めた人間が尊敬されてきたが、現在では自分が知識を持っていなくても上手に検索できる人間の方が周囲の賞賛を得る存在になったということ。

問題二

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

「……は？ それで？」

朝の学級活動が終わったあと、すぐにみなみは意を決して学の席の横へ行き、彼に話しかけたのだが、反応はいま一つだった。でも、言いだした以上は引けなかった。それに学のためを思つての言葉なのだ。

「だ……だから、次の社会の時間、江崎くん、林先生に当てられるよ」

学は眼鏡のブリッジをちよつとだけ左手の中指で押し上げた。

「準備をしておいた方がいいと思う」

「……なんでそんなこと、僕に言うの？」

いつの間にか憲太がそばに来て、学の席の背もたれを両手で掴み、みなみの顔をじつと見た。

「なにになに？ 学がどうしたんだよ？」

「どうもしないよ」

学は教科書とルーブリーフを鞆から取り出して、机の上に置いた。「次の時間、当てられるって言われただけ。だから僕は、どうしてそんな忠告をわざわざするのか、訊いたんだ。手塚さんが僕に話しかけるなんて、すごく珍しいし」

「そうだよなあ。なんで？ どうしたの？」

学の口調とは違い、憲太の問いはあくまで陽気だった。①みなみはその明るさに背を押され、打ち明ける。

「夢で、見たの」

「夢？」

憲太と学は同時に訊き返した。みなみは大きく頷いた。

「わたし、靈感っていうのかな、そういうのが、あるの。だから……」

「へえ。正夢になるかも、みたいなの？」

憲太はそう言い「おまえの夢の中で、俺は当てられてた？」と人差し指で自分を指した。みなみが今朝がた見た夢では、学が林先生になにかの解答を求められているビジョンしかなかったから、「松本くんは、夢に出てこなかった」と答えるし

かなかった。

憲太は「なあんだ」とがっちりした肩を竦めた。学はとつくに興味を失ったかのように、頬杖をつきつつ、シャープペンシルをノックして芯を出したり、引つ込めたりを繰り返していた。

「②と、とにかくそうだから」

みなみは自分の席——一年生は四人しかいないから、斜め前に移動するだけなのだが——に戻って、授業の準備をした。

「予言」は当たるが、みなみの期待に反して、そのことに反応したのは、嘘をつく癖があるのでみなみがあまり好きではない柏木亮介だけだった。その後みなみは学が七月の社会見学前に交通事故で死ぬ夢を見て、それを学に伝える。社会見学当日、学は欠席し、

昔の工事では人柱（神にささげるために、人を生きたまま埋めること）が立てられたことがあったと聞いていたみなみは、見学先の九谷川トンネル跡で幽霊を見る。

社会見学の翌日、登校したみなみは、教室の戸を開けるや、目を見張った。

「③学がいたからだ。」

「あ」

学の机に手をつけていた憲太がすぐに気づいて、声を発した。

「おはよう、手塚さん」

戸からすぐのところに棒立ちになってしまったみなみに、学は振り返ってにつこりと挨拶してきた。

すでに教室にいた亮介も、その声でみなみに視線を送ってくる。

「なんでそんなにびっくりしてるの？」

「④笑顔なのに学の心は違うと、みなみは敏感に悟る。でもそれは、みなみでなくともわかるのだろう、学級活動のために一年の教室に来た弥生も、すぐさま事の成り行きを見守る表情になった。」

「昨日は、もともと法事で欠席する予定だったんだ。予言どおりに死んでなくて、残念？」

学はみなみの本音をやすやすと暴いてみせた。「手塚さんは僕の命なんかより、自分に特別な力があると証明したかった

ようだし」

「……え、でも……」

みなみはしどろもどろになった。「でも……本当に夢で」

「正夢くらい、誰だつて一生のうちに何度か見るよ。それ、普通だよ」

学は椅子から立ち上がった。細身なのに、学からは威圧感がほとばしり出ていた。その威圧感は、次に怒りと軽蔑に変わった。

「手塚さん。もし僕から、手塚さんは近いうちに死ぬよ、僕には超能力があるからわかるんだ、なんて言われたら、楽しい？」

磨かれたレンズの横のフレームを右手でくつと上げたと同時に、学は嘘臭い微笑みをあつさり手放して、みなみを冷たく睥睨した。

「僕は、とても不愉快だった」

どこの世界に、自分が夢を見たからおまえは死ぬなんて断言されて、嬉しがる人がいるの？——学は容赦なかった——君は自分のために予言したんだ。自分の満足のために。

「特別な存在になりたくて。自分のアイデンティティを確立したくて。違う？」

「あ、あい……なに？」

学の口からこぼれた知らない単語をみなみは訊き返したけれど、学は教えてはくれなかった。そんなこともわからないのかと言わんばかりに、さらに目つきに侮蔑を混じらせただけだった。

「手塚さん、最近急に予言とか霊能力とか言うようになったよね。小学校のころはそうじゃなかったのに。昨日もトンネル跡でひと騒動起こしたんだつてね。憲太から聞いたよ」

学は再び椅子に腰かけ、右手でシャープペンシルを躍らせ始めた。

「うちのお母さんが言っていた。君みたいな『自称・わたしには靈感があるの』つていう女の子、お母さんの中学時代にもいたつて」

学は続ける。「お母さんが言うには、そういう子つて、きれいでも可愛くもない、勉強もあまりできない、これだけは誰

にも負けないうものがなくせに、自意識だけは過剰な子が多かった。幽霊って、他人には見えないことが前提で、答え合わせの必要がないからね。言ったもの勝ちなんだ。なにもできないけど事実を認めたくない、勘違い気味の子が使いたがるのもわかるよ。手塚さんもそうなのかな？」

弥生がため息をつき、いつもの一番端の席に座る。⑤ みなみは混乱の極みにいた。ものすごく馬鹿にされている気がする。でも、反面で学の言葉はあまりに痛い。心のもっともかなめの部分に当たっているからだ。

「大人になったら、いつの間にかそんな子はいなくなっちゃって、お母さん笑ってた」

「でもわたしは、本当に江崎くんが授業で当てられるのを……」

「一年生は四人しかいないんだよ？ 当てられるのなんて珍しくもないよ。みんななにかにかで、毎日当てられている」

「本の、霊能力チエックで……」

「あれ、ちらっと見たけど、僕もほとんど当てはまったよ。冬に静電気ではちばちするのなんて普通だし、肩揉みしたら、たいがい喜ばれるよ」

みなみは自分が崖の上に佇む心象風景を見た。その崖が学の一言一言で崩れ、どんどん立っていられるスペースが小さくなっていく。

「本当に……見たことがあるの。おじいちゃんの幽霊と、昨日だって……。オーラは金色で……予知夢も……」

「ああ。手塚さん、一年後の僕たちを予知してたね。四人は四人でかわらず教室にいる、って」

学は横の憲太を見上げた。「憲太、教えてやりなよ」

「あのさあ、手塚さん。俺のじいちゃん言ってたんだけど」

憲太は気まずそうに耳の後ろを掻いた。「この分校、来年度からは本校と統合されるんだよ。四人で授業を受けるのは、今年が最後だよ。えっと、知らなかった？」

憲太の祖父は村長だ。みなみは初耳の情報に手から力が抜けた。

「残念だったね、これも外れだ」

どさり、という音がした。みなみの鞆が床に落ちた。

「わたしは……小さいころから、電話や人が来るのがわかったり……勘がいいってお父さんやお母さんから……」

「手塚さんは今まで目が見えたり耳が聞こえるのを、誰かに自慢まんしたことはある？」

「えっ？」

みなみには、学が急に話を変えたとしか思えなかった。しかし違ちがった。学はあくまでみなみを追おい詰つめ続つけていた。

「世の中には体の不自由な人がいるけれど、ありがたいことに僕はそうじゃない。手塚さんも同じだ。僕らにとってはなにかを見て聞くのは普通にできる。物心ついたころから当たり前のこととして受け止めてるよね。僕の言うこと、わかる？」

とりあえず、みなみは頷うないた。

「もし、最初から日常的に物事の先がわかったり、幽霊が見えたりしていたら、それだって手塚さんにとっては五感と同じに、当たり前のはずだよ。僕なら逆に、どうして自分ではできないのに周りにはできないのか、とても戸惑まどうと思うよ。特別だとアピールするなんて、考えもつかないだろうな。だって、自分にとっては特別じゃないんだから」

学の指の間でダンスしていたシャーペンシルが、握にぎられて止まる。

「僕、手塚さんが急に霊能力がどうこう言い出したとき、どこか自慢まんげだなんて感じた。自慢するのは手塚さんもそれが『特別』だと思ってるからだ。普通だらけの中にたまたま出てきた、イレギュラーな、当たり前じゃない出来事だからだ。つまり、君には霊能力なんてないんだ。手塚さんはとりたてて取り柄えのない、ただの人なんだよ」

みなみの手足は冷たく、反対に顔は熱あつかった。頬ほのにきびが痛い。そのにきびの上を、涙なみだが流れ落ちていく。みなみは涙をすすった。

「……九谷川トンネルの工事には、人柱は使わなかったって、二年前に聞いたわ」

弥生の声が沁しみみ渡わたるように教室に響ひびいた。⑥ 学はもうそれで十分だと思っただのか、ちらとみなみを見てから体勢を変え、前を向いた。

涙をかみかかった。けれども、みなみはティッシュを持ってきていかなかった。ハンカチがあるかと、スカートのポケットに手を突つ込んだ。なかった。

鼻の穴から垂れてくる涙を、必死ですする。

——君には霊能力なんてないんだ。

——取り柄のない、ただの人なんだよ。

じゃあ、じゃあ、わたしは誰なの？ わたしはなんなの？ わたしにはなににもないの？

鞆を拾い、席に座る。弥生がそつとポケットティッシュを机に置いた。それをもらって思い切り涙をかむ。

違う、違う。わたしは特別。わたしにだって特別ななにかがある——諦めきれないみなみは、丸めたティッシュを右手の中に握りしめ、目をつぶった。自分の力と金色のオーラを信じて、未来を見ようとした。

そのときだった。

「僕も、トンネルのところで女の人を見たよ」

亮介がふいに口を開いた。

「だから、手塚さんが幽霊を見たのも、本当だと思うよ」

教室に微妙な空気が流れ、みなみは我に返った。

息を吸って吐くかのように、自然に嘘をつく亮介。その亮介が、幽霊を見たと言った。

ああ、そうか。

顔の熱が静かに引いていく。

みなみはようやくわかった。この冷めた感覚、嘘つきと思う気持ちは、今まで自分に向けられていたものなのだ。こんなふうに、学やみんなを呆れかえらせていたのだ。

嘘つき亮介が言うなら、人柱の幽霊はいなかった。勝手に勘違いして霊能者気どりでいたから、それっぽいのが見えただけ。砂漠で喉が渴いた人が、オアシスの幻を見るように。

人とは違うと思ったかった。もしそうだったら、これだけは誰にも負けないという力を①よすがに、胸を張って立つことができたのに。

わたしは普通。特別なことなんてなにもできない、どこにでもいる人間。

名前のない通行人A。

潮が引いていくように冷めゆく頭の中で、みなみは熱に浮かされていいたときの自分を罰するように、ひたすらに念じ

続けた。

わたしは、なにものでもないんだ、と。

村が吹雪に襲われ、生徒と教員達が学校に泊まることになった夜、面白い話をするように求められた亮介は、作り話として自分の身上話をする。これが作り話ではないと気付いた弥生、憲太、学、みなみは、今まで亮介が亮介なりの優しさで、自然にその場限りの嘘をついていたことを知る。

生田羽村で暮らしてみないか。

退院したものの、学校へ行けるようになるまでしばらく自宅で静養していた二月末の昼下がりに、母親が亮介の自室に顔を出し、そう持ちかけてきた。

「お母さんもこの写真集を見て、とつても気に入っちゃったの」

母親の手には、院内教室の本棚にささっていた写真集があった。わざわざ探して取り寄せたのだろうことは、言うまでもなかった。

「パソコンで村のホームページを見たら、農地や住宅を無償で貸し出して、都会から家族を呼んでいるのよ。お母さん、自分で自分の食べるものを作る生活って、憧れていたのよね」

お父さんも大賛成していると、母親は明るい顔をした。

「お医者さまもね、自然の中で伸び伸び過ごしたほうが、ストレスがなくて体にいいかもしれないって。もし本当に引越すなら、お菓やもろもろのことも、地元のお医者さまに話を通して面倒をみてもらえるようにしてくれるだろう、母親の目に

亮介は「そうなんだ、いいね」と笑った。嬉しそうな顔を作ったつもりだった。うまくいったのだろう、母親の目に安堵の色が差した。

「じゃあ、いろいろ準備を始めましょうね」

母親は写真集を亮介の膝に乗せ、部屋を出ていった。亮介は黄色い付箋のついてあるページをめくった。亮介がいつかな

んの気なしに眺めていた、サンピラーの写真が、目に飛び込んできた。

凍りついた空気中の水蒸気——ダイヤモンドダストが、斜めから差し込む朝日や夕日に反射してできる現象だと、最後のほうの注釈のページにはあった。どうして反射が縦方向にのびるのかとか、難しいことは亮介にはわからなかったけれど、こうして写真集に掲載されるくらいなのだから、見ようと思ってもなかなか見られるものではないのだろう。

両親はこの景色を自分に見せたがっている——感じとれない亮介ではなかった——だから、これが見られる土地を気に入った、東京からわざわざ一家で引越すなどと言うのだ。

自分の体がよく普通だったら、絶対にありえなかった。お父さんは仕事まで辞めなくてはいけない。今住んでいるマンションも、売りに出すだろう。

そして、亮介はまた悟る。

お父さん、お母さんがこうまで生田羽村に行こうとしている理由は、一つしかない。

たぶん、もうすぐ僕の間は終わるのだ。

だからこそ、最後に望むものを見せ、望む場所でそのときを迎えさせてあげたい。

そんなふうにいる。

膝の上で開いた写真を、指先で撫でた。亮介は別に生田羽村で暮らしたくなかった。ダイヤモンドダストもサンピラーも、この目で見なくなつて構いやしないのだ。どんなにきれいだろうと、その柱をよじ登つて、幸せしかない世界へ行くわけでもない。

けれども、⑦それは口には出してはいけない。

両親は亮介によかれと、あえて嘘をついている。だったらこちらも、嘘でも「行きたい」と言わなくてはいけない。

亮介のためだけを思つて、不自由に飛びこもうとしている両親に、本当は興味などないのだと打ち明けたら、どんなにかつかりするか知れない。

それからがつかりしたあとで、必ず、次の『亮介のためのどこか』を探す。

亮介には、最後はここで過ごしたいという希望はなかった。

だったら、東京だろうが生田羽村だろうが一緒だと、亮介は自分を納得させた。

両親をこれ以上あれこれ悩ませるのも、心苦しかった。

自分が「生田羽村に住んで、最後にサンピラーを見たい」のならば、話は簡単なのだ。真実を言うより、嘘をつくほうがずっと両親のためにはいい。

それに——雪原の中に立つ薄い金色の柱を、亮介は凝視した——嘘でも「見たい」と言い続けていたら、もしかしたらそのうち自分の心は騙されて、本当に「見たい」ような気にもなるかもしれない。

実際に見たらきれいだと、見られて幸せだと、正直に思えるかもしれない。

嘘をつき続けようと、亮介は心に決めて写真集を閉じ、アルトリコーダーを手にとり組み立て、*『アリオソ』——『教会カンタータ第五十六番』を吹き始めた。

自分にぴったりの副題がついているこの曲を、亮介は毎日吹いた。

生田羽村なら、きつと田舎で周りに家もないだろうから、窓を開けて吹いたとしてもきつと怒られない。

⑧ 一つだけ、生田羽村のいいところを、亮介は見つけた気になった。

翌朝、校庭に立つサンピラーを見た亮介は、新雪の積もる校庭に飛び出して光の端に触れると、ここが自分のゴールであると感じ、幸せに満たされつつ雪の中に倒れ込む。亮介はすぐに病院に運ばれ、もともと入院していた東京の大病院へと転院していった。そして、修了式の日、最後の学級活動として、一人一人がみんなの前でこの一年を振り返っているところへ、亮介からの手紙が届く。

林は封を切りたい心を押しとどめ、封筒をワイシャツの胸ポケットに挿した。「そうだね。先生は手塚さんの話も柏木くんの手紙を読むのと同じように聞きたいよ」

みなみは顎を引き、やや上目遣いになった。でもそれは、決して不満の表情ではなかった。みなみは素直に「はい」と答えて、すうと息を吸い込んだ。

「わたしは去年の今ごろから、自分って何者なんだろうって考えはじめました」

話したすと、彼女の頬はさらに赤らんだ。緊張と注目を浴びている恥ずかしさで、そうなってしまふのだろう。けれどもみなみはゆつくりと、ときおりつかえながらも、自分をさらけ出す勇気を捨てなかった。

「何者なんだろうって考えて、わたしは、どうせなら、特別になりたいなって思いました。どこにでもいる普通の子だったら、つまらないし……。マンガやドラマでも、名前もない脇役より、主役のほうがいいし……。主役じゃなくても、せめて重要な、いることに意味のある役の人になりたいなって。それで、わたしは、みんなはできないけれど、わたしだったらできることはないかって、探してみたんす。一度は、これかかってものを、見つけたと思ったんだけど……」

学が目を伏せた。みなみは制服の横で手のひらの汗を拭い、唾を飲んだ。

「でも、わたしにはなにもなかった。全然、特別じゃありませんでした。思い知らされたときは、悲しかった。主役になんて絶対なれない、個性も特技も能力もない、そのへんに普通にいる通行人Aのまま、大人になって、ずっと生きるのって、なんか本当に、いてもいなくてもいい感じで、心の底から自分がかっかりしました」

みなみの視線が、林の胸ポケットに注がれる。「がっかりしていたけれど、吹雪の夜に柏木くんがしてくれたお話を聞いて、考えがちよつと変わりました。世の中には、いろんな人がいます。普通の大人になるのを、すぐ羨ましいと思っていたよりも、きつと価値がある……。普通に学校に通って、普通に遊んで、普通に勉強して、普通の大人になって、普通に働いて結婚してお母さんになれたりしたら……」

みなみの最後の一言には、とても心がこもっているように、林には聞こえた。

「^⑨なれたりしたら、わたし、幸せだと思います」

みなみが座る前に、その場にいる全員が同時に手を叩いた。たった四人の、それでもとても大きな拍手の中、みなみは嬉しそうに笑って着席した。

(乾 ルカ『願いながら、祈りながら』 徳間書店)

〈注〉*睥睨……にらみつけて威圧すること。

*『アリオソ』——『教会カントータ第百五十六番』

……教会の礼拝用の、伴奏付き声楽曲。バッハによる作曲で、副題は「わが片足すでに墓穴に入りぬ」。

問一 線部 a 「よすが」・ b 「安堵」の意味として、最も適当なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 「よすが」

- ア 自分が頼りとするもの。
- イ 無くてはならないもの。
- ウ 他の人に対して自慢するもの。
- エ より成長させてくれるもの。
- オ 周囲を圧倒するもの。

② 「安堵」

- ア 苦々しく思う気持ち。
- イ 喜びの気持ち。
- ウ ほっとする気持ち。
- エ 後悔する気持ち。
- オ 優しい気持ち。

問二 線部 ① 「みなみはその明るさに背を押され、打ち明ける」とありますが、この時「みなみ」はどのように思ったのですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 憲太の明るさにつられて自分も明るい気持ちになり、前向きな気持ちで話そうと思った。
- イ 憲太の明るい雰囲気（ぶんき）に圧倒されてやめるにやめられなくなり、話さざるを得ないと思った。
- ウ 憲太の明るさの中に自分への好意が感じられ、憲太にこそ聞いてもらいたいと思った。
- エ 憲太の脳天気な明るさにあきれ、もうどうでも良いと思いつつ、話すだけは話そうと思った。
- オ 憲太の悪意のない明るさを励まし（はげ）のように感じ、最後まで話してみようと思った。

問三——線部②「と、とにかくそうだから」とありますが、この時の「みなみ」の気持ちはどのようなものですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 勇気を出して学に忠告をしたのにその思いを理解してもらえず、がっかりしている。

イ たとえ学が信じてくれなくても、自分の予言は当たると、自信を深めている。

ウ 忠告をまともに聞こうともしない学は、先生に当てられて困れば良いと思っている。

エ 学に聞く気が無くても、とにかく自分としては忠告はした、と満足感を抱いている。

オ せっかくな忠告したのにそれを聞いた学の反応があまりにも冷淡なので、戸惑っている。

問四——線部③「学がいたからだ」とありますが、「みなみ」はなぜ「学がいた」ことに驚いたのですか。説明しなさい。

問五——線部④「笑顔なのに学の心は違う」とありますが、では「学の心」はどのようなものでしたか。本文中から五字で抜き出して答えなさい。

問六——線部⑤「みなみは混乱の極みにいた」とありますが、この時の「みなみ」の思いを説明したものととして、最も適当なものをおの次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分に靈感があることは間違いないのに、たまたま今回外れてしまったばかりに、ここぞとばかり学に言いたい放題に言われて、どのように反論していいのかわからなくなっている。

イ 自分の靈感を人のために役立てようとしているのに、その善意を否定されて傷つく一方で、学の指摘が正しいという思いも自分の中にあり、何が正しいのかわけが分からなくなっている。

ウ いくら同じ村で育ったとはいっても、自分のことを詳しく知っている訳などないのに、まるで知っているかのようにいろいろと言いつける学にどう答えていいかわからなくなっている。

エ 夢で予知したことを話したのは善意からであったのに、学がまるで自分が悪いかのように思いをぶつけてくる理由が理解できず、どうしていいのかわからなくなっている。

オ 確かに自分の予知は外れたが、結果として生きていられたことを素直に喜ばしいのに、どうして学が腹を立てて自分に食ってかかるのか、わけが分からなくなっている。

問七 — 線部⑥ 「学はもうそれで十分だと思った」とありますが、何が「十分」のですか。答えなさい。

問八 — 線部⑦ 「それは口には出してはいけない」とありますが、それはなぜですか。答えなさい。

問九 — 線部⑧ 「一つだけ、生田羽村のいいところを、亮介は見つけた気になった」とありますが、「見つけた気になった」という表現は「見つけた」とどのような違いを表していますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 本当は全然「いいところ」ではないのだが、無理に「いいところ」だと思い込むことによって自分を励まそうとする気持ちを表している。

イ 見つけた「いいところ」が、ただ「いい」というだけではなく、それが自分にとって大きな意味を持っていると感じる気持ちを表している。

ウ 「いいところ」と言っているが、それを本当に「いい」と思っているわけではなく、実は全く喜びを感じていないということを表している。

エ 実際にはたいして「いいところ」とは言えないが、ようやく見つけた「いいところ」にすがろうという、せっぱつまつた気持ちを表している。

オ 本来に「いいところ」を見つけたかかったわけではないが、「いいところ」と思うことで前向きになろうとしている気持ちを表している。

問十 ——線部⑨「なれたりしたら、わたし、幸せだと思えます」とありますが、「みなみ」はどうしてそのように考えるようになったのですか。最も適当なものを次のア〜オから選び、記号で答えなさい。

ア 自分は他の誰でもなく特別な存在だと思いたかったが、重い病気を抱えている亮介の、普通に大人になりたいという願いを知って、ありふれたものと思っていた普通であることにも素晴らしさがあると気づいたから。

イ 特別であることには価値があり、普通であることには価値がないと思っていたが、病気のために特別な存在であった亮介を通して、特別だから人生の主役になれるというものではないということに気づいたから。

ウ 自分が人とは違うことを周囲に示そうとしていたが、自分の病気を知らせずにいた亮介のことを知り、そういったことは人に知ってもらうのではなく、自分の中で信じていけば良いことだと気づいたから。

エ 普通で特別なところがない自分という存在が嫌でたまらなかつたが、普通の少年であった亮介がサンピラーを見るという夢をかなえたことで、普通の自分も夢をかなえて幸せになることができるということに気づいたから。

オ 他の誰でもない特別な存在であることが幸せなのだと思っていたが、普通に生きて、普通の大人になりたいと願っている亮介の思いを知ること、普通であることにこそ幸せがあるのだということに気づいたから。

問題三

次の①～⑩の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

- ① 市内イチエンを見渡す丘に登る。
- ② キカイ体操の選手に憧れる。
- ③ ニクガンで見える星を数える。
- ④ 畑をタガヤして、大根を栽培する。
- ⑤ 決勝戦の会場には大カンシユウが集まった。
- ⑥ 一行は、天候不順のため道半ばで引き返すことになった。
- ⑦ 父の蔵書を整理する。
- ⑧ 特産物の商いを専門的に扱う。
- ⑨ 戦後は貧富の差が大きくなった。
- ⑩ 妹も物事の分別がつく年齢になった。

問題四

次の①～⑩の各文の空欄に入れるのに適当なひらがな一字を、それぞれ答えなさい。

- ① 小柄な少年が、（ ）ばしこく鬼から逃げ回っている。
- ② 相手がジョーカーの札を引いたのが見えたが、（ ）しらぬふりをした。
- ③ 彼女の話す声があまりにも（ ）ぼそいので、私には聞こえなかった。
- ④ 買ってもらったばかりの（ ）あたらしいユニホームで、まだ袖をとおしてもいない。
- ⑤ 近所のおじさんにいたずらを注意され、彼は（ ）にくらしい口をきいた。
- ⑥ 先生、明日は何時に（ ）出発ですか。
- ⑦ 掃除当番であるのを忘れていたら、同じく当番だった友人から（ ）きびしい言葉で注意された。
- ⑧ 娘は、（ ）まじめな性格で、融通がきかないところがあります。
- ⑨ 相手のいきおいに（ ）おされて、何も言い返せなかった。
- ⑩ 足の遅い私がリレーのメンバーになったら、みんなの（ ）荷物になってしまう。

問題五

次の①～⑩の各文の空欄に入れるのに適当な色を表す漢字一字を、それぞれ答えなさい。

- ① 彼と私は、まったく関係のない（ ）の他人だ。
- ② いよいよ、コンサート会場にその歌手が登場するというので、（ ）色い歓声があがった。
- ③ 彼は、今日下された判決に、（ ）筋を立てて怒っていた。
- ④ 彼は人の良さで知られているが、実は腹（ ）いところもあるのを私は知っている。
- ⑤ つまらない冗談を言って、同僚から（ ）い目で見られた。
- ⑥ 先生は、ふだんはまじめで堅苦しいほどだが、ふと（ ）目つきを見せる時がある。
- ⑦ 男ばかりのこの職場で、彼女は（ ）一点の存在だ。
- ⑧ 年齢をかさね、いぶし（ ）の演技をするようになる。
- ⑨ レスリング選手が大会四連覇の（ ）字塔をうちたてた。
- ⑩ 疑惑は（ ）色のまま、容疑者が釈放された。